

< ロシアの億万長者 >

巨額の富を築いた「赤い政商」たち

盛田 常夫

テロリストが潜んでいたブダペスト

ハンガリーとチェコを舞台にしている「赤い政商」や「赤いマフィア」に比べると、ロシアのマフィアは一回りスケールが違う。10月初めのTV2のニュースでは、ロシアの大物マフィアで、ハンガリーを拠点にしていたモギレビッチがビンラディンに武器と麻薬の交換取引を持ちかけていたと伝えている。

歴史を紐解くと、ハンガリーは旧体制時代から怪しい人物が潜んでいた街だ。国際テロリストのカルロスが時折、ブダペストに骨休みに来ており、定宿はホテル・ブダペストだった。ハンガリーの諜報機関は入国から出国までの足取りを押えており、何度か参考聴取をおこなっている。そのビデオテープはTVで放映された。

大韓航空爆破犯人の金賢姫は、ブダペストを経由して、ベオグラードに入った。ブダペストの北朝鮮大使館で、必要な物を手に入れたようだ。北朝鮮の諜報機関に誘拐された韓国の映画監督と女優は、ブダペストのハイアットホテル 8 階のアパートメントに住居を与えられ、金正日の指示で映画製作の仕事を与えられた。国際的な映画祭で賞を取れるものを製作するというのが目標だった。十分な資金が用意されていた。KCIA が彼らを連れ戻す直前まで、映画「ジンニスハーン」の製作準備が続けられていた。

フェリヘジ空港の異常な警戒体制は、テロリストにたいするハンガリーの示威行動かもしれない。もう簡単には入れないよという。

Forbes 億万長者リスト 2001 年

2001 年 7 月に発表された恒例の Forbes 誌の世界億万長者リスト（上位 500 位）の中にハンガリー人が 2 名入っている。ソロス（ショロシュ）が 50 位、チャールズ・シモニイが 499 位である。Intel 創始者のゴードン・ムーアが 60 位にランクされているのに、ハンガリー人のグローヴ（前 Intel 会長）の名前はリストにない。ちなみに、シモニイは MS-Word、MS-Excel の開発者で、ブダペスト工科大学のシモニイ名誉教授の息子である。毎年、自家用ジェットでブダペストに里帰りしている。

ロシアの億万長者（Forbes リスト）

順位	氏名	年齢	資産額（億ドル）	主要な持ち株会社
194	ホドルコフスキー	38歳	24億ドル	Jukos
272	ポターニン	40	18	Sidanko、Norilsk
312	ボグダノフ	50	16	Surgutnetgaz
336	ヴィヤヒレヴ	66	15	Gazprom
363	アブラモヴィッチ	34	14	Sibneft
387	アレクペロフ	51	13	Lukoil
387	フリードマン	37	13	Alfaグループ
452	チェルノムイルジン	63	11	Gazprom

ハンガリー人の億万長者は正当なビジネスで現在の地位を得たものだが、同じリストに入っているロシア人 8 名の素性は怪しい者ばかりだ。そのリストを作ってみた。当然のことながら、1991 年のソ連崩壊前のロシアには億万長者など存在しなかったし、その余地もなかった。いかにして、10 年という短期に 10 億ドルを超える個人資産が形成できるのだろうか。巨大エネルギー企業の私物化、これ以外に説明することができない。旧ソ連を除くヨーロッパの旧社会主義国では、外国資本を導入したハンガリーを除き、エネルギー産業の民営化は未だ実行されておらず、またそれらの諸国ではあからさまに私物化できる非文明的環境はない。ところが、ロシアの場合には、ソ連崩壊のどさくさに紛れ、外人投資家を排除し、政治家・新興事業家・官僚との結託によって、巨大エネルギー企業や市場性のある国営企業の民営化（私物化）が実行され、他の諸国では考えられないような巨額の富が個人資産に転化された。

億万長者の素性

これら億万長者たちの 10 年前の個人資産は、ほとんどゼロに近い。ホドルコフスキーは共産党青年組織コムソモールのモスクワ支部の幹部だった。1987 年に共産党の資金援助を得て、商業協同組合を設立し、さらに Menatep 銀行を設立した。1990-1993 年には政府に入り、閣僚会議顧問から石油・エネルギー省の副大臣になった。その間、商業共同組合の取引は増加し、Menatep 銀行を核とする産業グループを形成することになった。

彼の経済的富を決定的にしたのは、1995 年の Jukos（ロシア第二の石油企業）の 45% の取得である。3 億 5 千万ドルを提示したコンソーシウム（Inkom 銀行、Alfa 銀行、Rossiisky Kredit 銀行）の入札を無効にする政治的圧力を利用して、Menatep 銀行のダミー企業が、入札最低価格（1 億 5 千万ドル）を 9 百万ドルだけ上回る価額で落札した。もちろん、これがすぐに個人資産になるわけではないが、いったんダミー企業が入手した株を個人資産に転化させるスキームは彼らの常套手段である。これがホドルコフスキーの最大資産を構成している。

ポターニンはコムソモールから共産党に入り、父親が勤めていた体外経済関係省に勤務することになった。その能力が認められ、ソ連崩壊にともない、体外経済関係省と共産党の支援を受け、友人たちと商社を設立することになった。これは競争政策実行の一環として、政府や党が支援する事業化政策であった。エリツィン大統領就任にともない MFK 銀行と Onexim 銀行を設立し、旧来の人脈を利用して、大手貿易商社を顧客として迎えることになり、この銀行はロシアの第三位および四位行にのし上がった。

1995 年の巨大エネルギー産業の民営化は、ベレゾフスキーとポターニンがイニシアティブをとったもので、当時の閣僚会議にはホドロフスキーとも出席し、この計画を説明している。巨大国営企業にたいし、億ドル単位の融資をおこなう代わりに、融資した銀行が株式を担保にとるというスキーム（株式担保の融資）である。閣僚会議ではチュバイスが取り仕切り、ポターニン提案を閣僚会議決定とした。この決定にいたる過程で、クレムリンの政商ベレゾフスキーに敵対するグシンスキー（Moszt 銀行）、ヴィノグラードフ（Inkom 銀行）、アーヴェン（Alfa 銀行）、マルキン（Rossiisky Kredit 銀行）は排除され、実際の入札でもことごとく排除された。

この株式担保の融資は巨大国営企業の株式を私物化する最初のステップだった。これで何十億ドルという個人資産が形成されたのだ。無能なエリツィンは彼を取り巻く「赤い政商」（マフィア）に徹底的に利用された。

株式担保の融資入札

貴金属を採掘する優良企業 Norilsky 社（51%株）の入札では、Rossiisky Kredit 銀行が 3 億 5500 万ドルを提示したが、入札を受け付けるポターニンの Onexim 銀行は保証金の内容が条件に合わないことを理由に入札を無効として、Onexim 銀行のダミー会社が入札最低価格の 1 億 7000 万ドルを 10 万ドルだけ上回る 1 億 7010 万ドルで落札した。

同様の手口で、巨大石油企業 Sidanco 社の 51%は、もう一つのポターニンの銀行である MFK が、入札最低価格 1 億 2500 万ドルを 5 百万ドルだけ上回る価格で落札している。この際も、入札を受け付けた Onexim 銀行は、Rossiisky Kredit 銀行の入札参加を無効としている。

旧ソ連の中で最大企業は Gazprom 社だが、第二の企業は Rosneft 社で、ソ連の石油油田を所有する国営企業である。クレムリンの政商ベレゾフスキーは若い石油商アブラモヴィッチと結託して、Rosneft 社の最良の油田と精製所を分離して新たな企業 Sibneft 社を設立することを計画した。石油・エネルギー省の反対を押し切って、大統領令で Sibneft 社の設立が決まり（1995 年夏）、その暮れに民営化（株式担保融資）入札（51%）が行われた。入札最低価格は 1 億ドルで、Inkom 銀行の子会社が 1 億 7500 万ドル、ベレゾフスキーの金融会社が 1 億 30 万ドルを提示した。しかし、Inkom の子会社は入札決定当日に入札辞退の FAX を送り、入札から降りることになった。入札には最低二社の参加が要件になっているが、ベレゾフスキーの金融会社と Menatep 銀行のコンソーシウムが 1 億 10 万ドルの価格

を提示しており、入札は成立し、ベレゾフスキー（アブラモヴィッチ）が Sibneft 社を手に入れることになった。完全な出来レースである。

1995 年末に実行された株式担保融資

企業名	業種	放出株(%)	落札価格	市場価額	1997年8月1日の市場価額
				(落札価格)	
百万ドル					
Lukoil	石油	5	35	700	15,839
Jukos	石油	45	159	353	6,214
Surgut	石油	40	88	220	5,689
Sidan co	石油	51	130	255	5,113
Sibneft	石油	51	100	196	4,968
Norilsk	金属	51	170	333	1,890

(注) 市場価額は、落札価格をもとに算定したもの。

(出所) Paul Klebnikov, *Godfather of the Kremlin*, Harcourt, 2000.

億万長者の中で、アレクペロフは別格で、彼は根っからの石油採掘技術者である。1983年にコガリム採掘所の所長に任命され、ソ連でも有数の採掘所に押し上げた実績をもつ。これによって、1990年にソ連時代最後の石油・エネルギー省副大臣に任命され、巨大石油企業の経営戦略を学ぶことになる。この間、西欧の石油メジャーを巡業し、経営を学ぶ一方、業務提携の実行に奔走した。最良の油田と技術者を統合して、Lukoil を創設した。1994年のクーポン民営化にあたって、一部を民営化するとともに、アレクペロフほかの経営陣が25%の株を購入し、アレクペロフがLukoilの経営権を握ることになった。

このアレクペロフの場合は、他のケースと異なり、詐欺的な民営化スキームで会社資産を私物化したのではなく、自らの技量と人脈で優良企業を創設し、私財を貯えている。ストックオプションのような形で巨大企業の株式を受け取り、それが個人資産になっている。それにしても、受け取った株式は途方もない報酬額である。

ボグダノフ、ヴィヤヒレヴ、チェルノムイルジンは、政府から巨大エネルギー産業の経営を任された官僚経営者である。彼らも経営者のストックオプションのような形で株式を取得しているが、そのような形容はあまりに奇麗事すぎる。自らの監督企業の株式を、役得として取得したということだろう。役得にしても、あまりに巨額すぎる。私物化という表現が適切である。

このうち、ヴィヤヒレヴは、Gazprom社に身内の借金の保証をさせたり、国外に設立した会社に安価に石油・ガスを販売し、売買益を私物化した疑いで、この夏前にGazprom社長を解任された。各種のルートを通して、Gazpromから年間20億ドルの収入が社外に流れているとも推定されており、国営企業収入の私物化は依然として後を絶たない。

同じことは国営航空会社アエロフロートについても言える。1995年にアエロフロート経営陣を一新した時に、ベレゾフスキーが所有する乗用車販売会社 Logovaz 社の経営陣が複数、アエロフロートの新経営陣に収まり、ベレゾフスキーのアエロフロート支配が実現した。1996-97年にかけて、ベレゾフスキーはアエロフロートの外貨収入の80%を、スイスのローザンヌに設立した金融会社 Andava 社に集中的に管理・運用させる体制を構築した。この会社（ベレゾフスキーの所有）は1997年のアエロフロート収入4億ドルの管理手数料として3.125%を得ただけでなく、さらにペーパー会社数社を設立して、アエロフロート-Andava 社との短期資金融通のスキームを作り、アエロフロート社から高利の利子をも詐取していた。こうして、アエロフロートの収入・資産が私物化された。常識では考えられないことが行われていた。

この種のスキームは外貨収入を得ている企業のほとんどが採用しており、会社の収入を国外に流出させる手段として利用されている。それが何段階かの洗浄を経て、個人資産に転化するのである。明らかに、ロシアの億万長者はまっとうな事業の遂行から私財を貯えたのではなく、各種のトリックを使いながら、国営資産や会社収益の横領によって、巨額の富を私物化した連中なのである。

プーチン登場は、このような無法な国家資産略奪に歯止めをかけるためだったと考えると理解し易い。蛇（じゃ）の道は蛇（へび）。強権を持ってしか、マフィアを抑制することができないのである。プーチン登場で国外に逃がれたベレゾフスキーとグシンスキーの個人資産は、Forbes のリストにはないが、彼らの略奪資産も上記の人物に劣らず大きいだろう。スペインの太陽の海岸で一生暮らして余りあるほどの財産を蓄えている。